

東大EMP第8期プログラム 最終報告発表 概要

(2013年3月9日)

チーム・メンバー	課題テーマ	タイトル	概要
[チーム1] 浅井 智範 小田 天平 関根 千津 田村耕太郎 堤 茂 林 正治	健康的で活力のある 超高齢化社会経営	見晴らしの良い、生涯現役社会	<p>我が国は2030年には高齢化率が30%を超えると予想されている。来るべき超高齢社会における主問題である「高齢者の就労」について焦点をあて、日本の将来の目指すべき姿について、共生を念頭におきながら考え、実現する社会システム「年齢不詳社会」を提案する。</p> <p>高齢化に併せて少子化も進展し、現役世代の労働力人口の減少が予想されている中、活力ある日本社会を持続的なものにしていくためには、高齢者を社会の重要な担い手として位置付け、「高齢者＝支えられる人」から「高齢者＝支える存在」へと大展開するソリューションを提示することにした。</p> <p>このソリューションは、「年齢不詳社会」の基礎であり、単なる高齢者問題の解決にとどまらず、社会全体を活性化させるシステムへとつながる。</p> <p>今回の発表では、これらを実践するための、日本の雇用デザインと、これを実現するツールについて具体的な提言を行い、その想定される効果について論じたい。</p>
[チーム2] 市本 博康 尾室 義典 加藤 雅樹 久間 博敬 後藤 禎一	資源・エネルギー活 用の規律による環境 保全	エコロジーに対する普遍的無意識 の覚醒	<p>地球温暖化が叫ばれて久しく、さらに東日本大震災以降エネルギー問題は大きなテーマとなっている。しかしながら、現実には、関係者の様々な努力にもかかわらず、温暖化に歯止めがかかっていない。我々は、この原因の一つには経済問題などの他の優先課題の存在や自己都合・儲けに走るご都合主義があるものと考えます。</p> <p>人間は誰も潜在的に快適な生活を望む。そこで、この人間の深層の無意識に働きかけ、一定の規制の下に、集団の智慧を最大限活用することにより、快適な生活と活力ある社会の実現を目指す「エコ・グループ主義」を提案する。</p> <p>当発表では、この「エコ・グループ主義」によるエコロジーに対する普遍的無意識を覚醒させる仕組みについて、地域をベースとしたインフラ面、教育面での取組みを提示し、明るい社会の拡大、将来への展開を示していきたい。</p>

<p>[チーム3] 赤井 厚雄 岡島 真人 加藤 千鶴 塚本 豊康 正田 周</p>	<p>経済・金融分野の貢献と影響力の制御</p>	<p>新たな資金循環導入による日本経済の再生</p>	<p>我々は、「社会・経済・金融」の相互関係が大きく変化する時代に生きている。過去20年の歴史を振り返ると、金融の巨大化と暴走によってその関係が大きく崩れ、金融が経済や社会の課題解決という本来期待された役割を十分に果たせないばかりか、グローバルにはむしろそれらに対する不安定化要素となりつつある事があきらかである。</p> <p>国内に目を転ずると、1500兆円といわれる個人金融資産や1000兆円をこえる現物資産（住宅）など巨額の資産が積み上がる一方で、それらの資産が実体経済の中で循環せず「滞留資産」として放置されているという現状がある。</p> <p>その背景には、近年の金融危機を受けた国際的な金融規制の強化や、それによる銀行など伝統的な金融機関の活動における制約の発生という新たな国際環境とともに、高齢化の進展による資産の預金集中、住宅などの資産市場の低迷などの国内現象が指摘される。</p> <p>これらの諸課題に対応し、国内の資産市場を活性化し、金融資産の「実体経済を支える」役割回復のため、国内資産の約6割を保有する「高齢者」をキーワードに「新たな消費」と「新たな投資」、それによる日本経済再生の可能性について検討を行った。</p>
<p>[チーム4] 田原 績 中嶋 基晴 平田 研 平野 正弥 松谷 竹生</p>	<p>多様な宗教、文化、政治を前提とした共通行動規範確立</p>	<p>柔らかい規範による共生へのアプローチ</p>	<p>近代以降、人間の活動領域・活動量は飛躍的に増大し、国境を超える環境汚染や温暖化の問題など地球規模の枠組みによる対応が必要な問題領域は拡大しているが、その解決は容易ではなく、従来の否定型・強制型・規制型のアプローチ（固い規範）には限界がある。</p> <p>我々は上からの強制ではなく対等な立場に基づく共生に可能性を見出す。その為の有力なツールは「対話」であり、実効性のある「対話」の要素として「共通の場作り」、「帰属の多様化」、「様々なチャネルの活用」、「違いの許容」、「とっつきやすい問題設定」、「漸進主義」といった身体的、実践的な作法を抽出した。</p> <p>そのうえで、我々は人間に本来備わる承認、自己実現の欲求に改めて着目し、多様な知を呼び込む「地球井戸端会議」をひとつのツールとして、「いいね」に象徴されるようなポジティブフィードバックの駆動による肯定的・自発的なアプローチ（柔らかい規範）を提案する。</p>
<p>[チーム5] 内田 了司 梶間 由哲 川端 健司 川原 仁 西川登志夫</p>	<p>先端科学技術の効用と新世界観の形成</p>	<p>科学と技術が織りなす光と影 -課題解決力、影の克服を通じた新世界観の発信へ-</p>	<p>豊かな人間社会の構築に貢献してきた科学と技術。しかし、現代社会では、地球温暖化や高齢化など、高度化・複雑化する社会問題に対して、既存の科学と技術が十分な解決策を提示できていない。また、福島原発事故やクローン生物など、技術のオペレーションが暴走し、人類の存在や生命に脅威を感じさせる事象もみられる。</p> <p>技術大国として世界をリードしてきた日本では、日本人の特性に裏打ちされ強みとなってきた高度な専門人材と強い内部組織に関して、先端的課題の解決に向けた再構築が求められている。技術のオペレーションの暴走に対しては、従来の技術リテラシーや規制に基づく対応が限界にきており、科学リテラシーで再度技術を見つめ直し、本質的な課題を見定める必要があると考える。</p> <p>最後に、最先端の科学と技術が、欧米とは異なる宗教や思想を有するアジアや中東などに広まる中、日本発の新たな世界観の発信の可能性があると考え、その方向性を提言する。</p>